



## 「精神医学古典シリーズ」のご案内

コロナ禍で日程が変更され、2021年9月19～21日の3日間、木下利彦会長の下、国立京都国際会館にて現地開催+オンデマンド配信で開催された第117回日本精神神経学会学術総会は好企画が多かった。すでに本誌1月号(第124巻第1号)編集後記で上野千鶴子先生の教育講演「女が増えると精神神経医学は変わるか?」が田口寿子編集委員により詳しく紹介されている。「革新と伝統が紡ぐ質の高い精神医学」という学術総会テーマにふさわしく、木下会長が「非常に力を入れた」のが上記上野講演も含めた56もの教育講演であった。なかでも目を引いたのが以下の「古典シリーズ」11演題・演者である(抄録からの引用で人物名は原語でなくカタカナ表記のまま)。

1. ヴィルヘルム・グリーゼンガー：統合失調症・双極性障害「中間領域」の病態を考える—グリーゼンガーとクレペリンの方法論を対比して— (加藤 敏先生)
2. クルト・シュナイダー：伝統的精神医学の思想クルト・シュナイダーの「臨床精神病理学」(古茶大樹先生)
3. カール・ヤスパース：臨床を考えるヤスパース：精神病理が苦手な先生方に (佐藤晋爾先生)
4. ウジェーヌ・ミンコフスキー：生命(いのち)と精神(こころ) (内海 健先生)
5. 呉秀三：呉秀三の『私宅監置の実況』と『わが国における精神病に関する最近の施設』(金川英雄先生)
6. エミール・クレペリン：クレペリンの時代からの一世紀 (渡辺哲夫先生)
7. カール・グスタフ・ユング：主体の定位・対立・反転と心理療法の変化 (河合俊雄先生)
8. ジークムント・フロイト：フロイトの嘆きと驚き—治療を目指すものと妨げるもの— (新宮一成先生)

9. ジャック・ラカン：ラカンと今日の精神科臨床 (鈴木國文先生)
10. エルンスト・クレッチマー：多次元診断と治療 (久江洋企先生)
11. オイゲン・ブロイラー：スキゾフレニア概念の創始者 (人見一彦先生)

下世話な話だが、編集子などはこのラインアップを見て、いささか高額なオンデマンドの総会参加費もこれだけで元が取れたと思ったものだ。古典の大家がそれを紹介するのに、この人以外ないという適任者が演者として選ばれている。本編集委員会も心が動いた。これまでにも例えば、新潟での第115回日本精神神経学会学術総会では、「精神病理学の古典を再読する：DSM精神医学の補完を目指して」というシンポジウムが構成され、そこから本誌第122巻第9号(2020年9月発行)においてシンポジウムと同じタイトルの特集が編纂され、Griesinger, Kurt Schneider, Tellenbachが論じられている。

編集委員会で検討し本誌では、木下会長の意思を踏襲して、「精神医学古典シリーズ」の連載企画を開始することにした。本企画の趣旨は、DSMやICDに準拠した現代的精神医学の体系しか知らない若い世代の学会員を主な読者対象にして、近代精神医学史上の主要人物とその業績を紹介し、今日の精神医学の位置から見て、その意義を改めて評価しようとするものである。シニア世代の読者でももちろん一読に値するのは、ご案内の通りである。現地参加もオンデマンド視聴も叶わなかった学会員には、まさに必読である。シリーズの冒頭には、連載にあたって編集委員会から「精神医学古典の展望」を付すことにした。

現在本誌では、ICD-11の連載が継続している。連載スタートがICDの連載終了後とするかどうかはまだ審議中である。乞うご期待。

西岡和郎